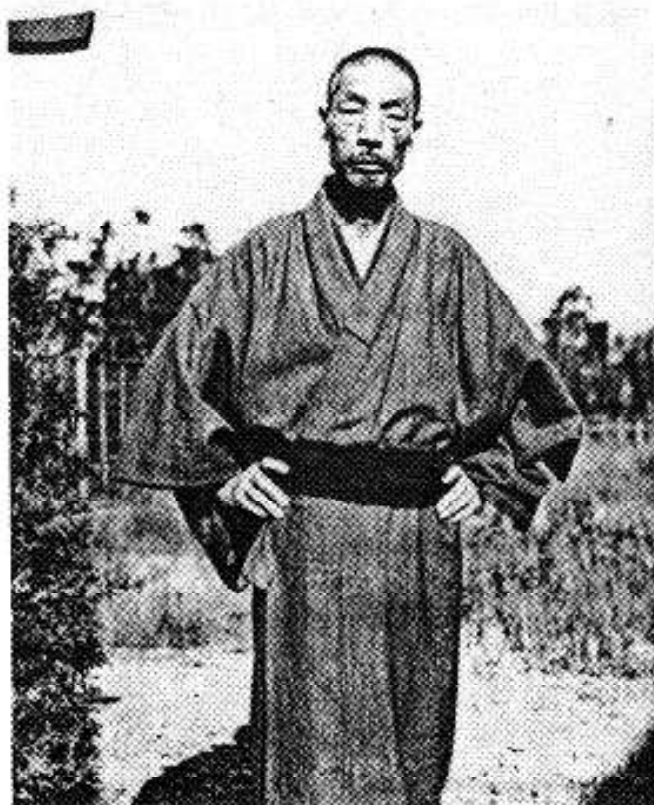




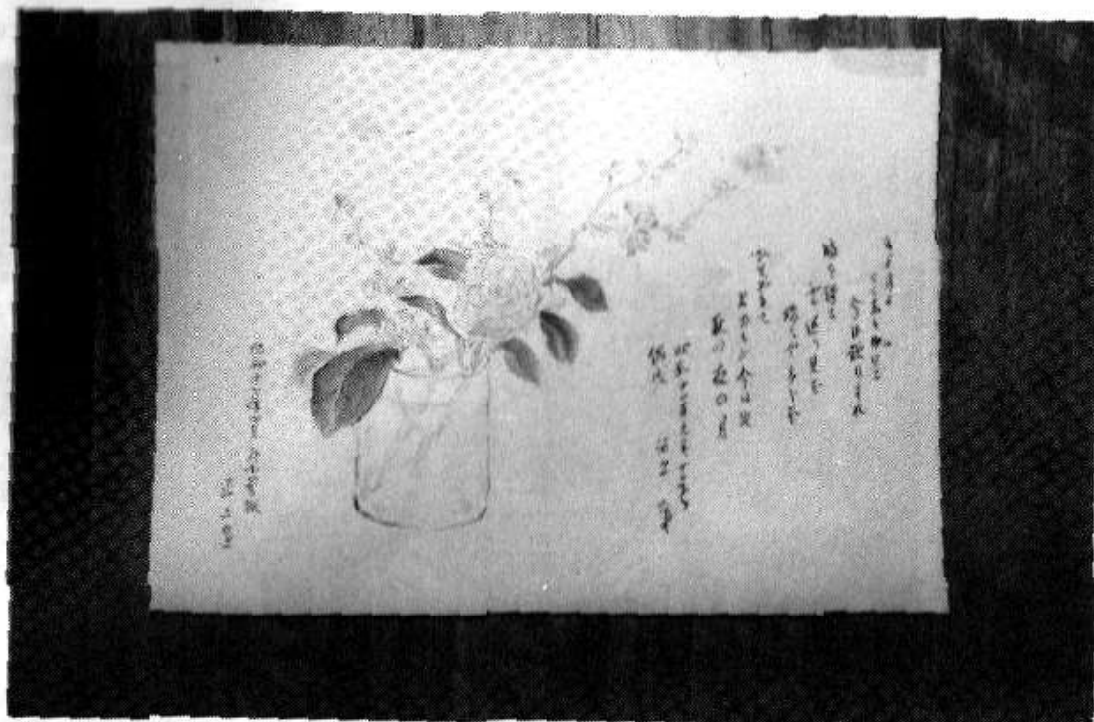
河上肇紀念會會報

NO. 26

1987・6・15

老驥伏櫪志在
千里烈士暮年
壯心不已

昭和十一年九月念二日 集



目次

「全集」以後	杉原四郎	(1)
中国訳目録稿	一海知義 米浜泰英	(5)
六一年度総会特集 ——出席者のスピーチより——		(10)
「宗教的真理」と「科学的真理」の 統一的理解について	佐藤克己	(20)
会 員 通 信		(22)

『全集』以後(二)

杉原四郎

昨年末送られてきた東京の古書店のカatalogに河上肇の色紙類が数点のついていた。その中に獄中の作があったので、私は電話で注文した。すでに数人の予約があり、結局抽選となったが、運よく私の手に入った。また最近別の古書店で河上肇の文章ののっている雑誌を入手した。今度はこの二つを河上の新資料として紹介することにしよう。

{一}

まず獄中の作品(表紙裏、写真参照)であるが、それは縦二四・五センチ、横三三・五センチの一枚の和紙で、左半分に「昭和十一年四月 於小菅獄 正三書」とかかれた水彩画(コップに活けられた木爪と山茶花で、木版刷とおぼしい)が描かれ、右半分に「昭和十一年九月一日偶成 河上肇」と書かれた詩がしるされている。その詩は九月十三日の日記に「偶成」と題して書かれている

もののうち、「十四日夜改」とある方のもの(全集②・二九六―七頁)と同じで、つぎのごとくである。

日よ月よ

とく去りゆけと

今は欲りすれ

時を経て

ふり返り見ば

惜くやならむ

ひとやにて

君おもふ今日の

秋の夜の月

林正三が四月に署名した画の和紙がどうして河上の手にとどき、それにどうして河上が九月にこの詩をかいたのか、そしてこの和紙がどのような経緯で獄外に出て現在にいたったかを知る資料はのこされていない。ただ林

正三と河上との交渉については、河上の日記に若干の記録はある。河上の獄中日記に林が最初に登場するのは、昭和十一年三月二十七日で、「夕刻居房へは林さんに貰ったマネーの『朝食』（色刷、ほぼ半紙大）を持ちかへり、洗面台……の上の壁に貼りつける」とある。四月六日に「林さんからはこべという草を初めて実物について教はる」とある。四月八日には「昨日見せて貰った林正三氏の詠草の中から、よいと思ったものを数首書き留めておく」とあって短歌が十四首ならんでおり、最後に、「以上の歌を見せて貰った後に林氏に贈らむとて私のよむだ歌」としてつぎの短歌が書かれている。

たくましますらを君も吾が如ふるさとしのび牢にて泣くか

五月十八日にも林正三の短歌とそれに対する返歌がしるされており、二人の関係の深さがうかがわれるが、河上は林についてそこでつぎのように書き残している。

「林氏は五・一五事件の関係者で、橋孝三郎氏の義弟である。美術学校の出身、私より十数歳の齡下。十二年の刑期が恩典にて四分の一減。下獄は私よりも後」。

河上は昭和十二年六月六日、つまり出獄予定日の八日までに教誨堂で林正三に「ほんの一言別れの挨拶をかけ

た」。出獄後の昭和十三年十一月三十日の日記にいう、「獄中の林正三氏に減刑の喜びを言ひ送り、序に落葉の詩と画を寄せしに對し、鄭重なる返事あり、中に落葉の歌など載す。……林氏は……資性極めて溫良、稀に見る善き人柄の人なり」。翌十四年二月十二日の日記にいう、「昨日小管に服役中なりし林正三君仮釈放にて出所されし由」。

出所後の林と河上との間にどんな交渉があったかを知るすべはない。ともあれ林の画に河上が詩をそえた一枚の和紙は、はしくも獄中でめぐり合った志士にして文人たるこの二人の間の友情のしるしとして、私たちの心をあたためてくれる。

(二)

布施辰治主幹、佐藤義和編輯、生活運動社刊行の月刊雑誌『法律戦線』第八巻第九号（一九二九年九月号）に河上肇の短文がのっている。これは「新労農党樹立の提案を批判す」という特輯の中におさめられた諸家の十五の文章の一つであって、河上も雑誌から提案に対する意見を求められて寄稿したものであろう。布施辰治の巻頭言が大山郁夫・細迫兼光・上村進による提案を批判

しているが、十五の文章の大半も批判する立場で、河上のような賛成者はすくない。以下に河上の文章を引用しておこう。

満幅の賛意を表す

河上 肇

私は『新労働党樹立の提案』に全幅的の賛意を表してゐる者です。その理由は、九月号の『中央公論』および間もなく私の発行するであらう『社会問題研究』で陳述しておきました。後者では、レーニンの『小児病』を紹介することを主眼として筆を執りましたが、私の考へでは、現在くらゐ此の『小児病』一巻を熟読せねばならぬ時期は、今までになかったらうと思はれます。今日まで吾々は日和見主義との斗争に力をつくして来たが、今後はこれと併せて小児病と斗ふことが必要でせう。それが、極めて豊富な経験を短年月の間に集中したロシアの『運動の最後の言葉』であると信じます。

以上がその全文である。『中央公論』九月号の文章とは、河上「『新労働党樹立の提案』を読む」を指しており、『社会問題研究』での陳述というのは、同誌九六冊（昭和四年八月二十九日刊行）の「小児病を克服せよ」

のことで、この二つはともに全集第十六巻に収録されている。この文章もまた本来第十六巻におさめられるべきものである。

なお前号の(一)でふれた「教育家の社会的待遇」という一文は、近刊の『河上肇評論集』（岩波文庫）におさめられることになった。

(三)

河上肇に関する文章をふくむ諸著作がいくつか出ているが、ここでは本会の会員によるつぎの二著を紹介しておきたい。

一海知義『読書人漫語』、新評論、一九八七年一月

一海氏の編集された『河上肇獄中往復書簡集』（上・下、岩波書店）のことは別にとりあげたい。本書はこの十年あまりの間に書かれたエッセー六十余篇が七つのグループにまとめられたもので、最後のⅧが「河上肇断想」である。ここにはこの会報にのった「河上肇と中国文学」らの三篇がおさめられている。Ⅲにある「王守樁のこと」もやはり本会報にのったもので、河上肇のセミナーで学んだ王学文のことを書いたものである。本書におさめられた読書論で書評のたぐいに著者の人柄と学殖がよく

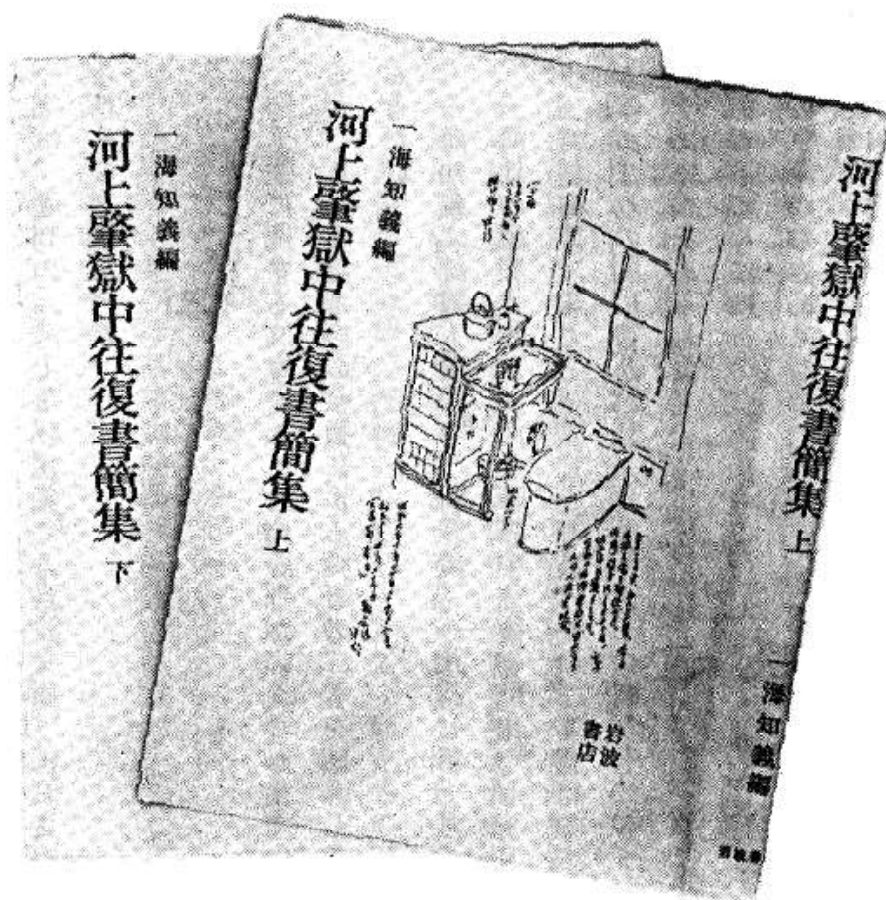
うかがえるのはもちろんだが、身辺の雑事を語る短文をあつめたⅣの「コラムの文章」がとりわけ読んで愉しい。これらの文学の中にも「禁煙」とか「仕事メモ」とか、「甲子園と後樂園」などのように、事あるたびに河上肇が登場するのが実に愉しい。

塩田庄兵衛『京都にて』、非売品、一九八七年三月

一九七四年から十三年にわたる京都での生活が立命館大学の定年退職を機に了るのを記念すべく上梓されたエッセー集で、装丁に使われた麤脂の布は、立命館の卒業証書のケースにならったものという。

集められた文章の中に河上肇に關説するものがいくつかある。「法然院の墓地」は一九七八年十一月に開かれた法然院での河上肇記念会の模様が、また「自叙伝を読む・5」は世界評論社でアルバイトをしていた著者が河上の『自叙伝』の最も早い読者のひとりとしてうけた感銘が語られており、「河上肇音読会」や「河上肇音読会のこと」は著者が主宰する音読会の成立の由来や活動状況をのべたものである。さらに本書の巻末にある定年退職記念講義「社会・労働運動を学んで四十年」でも著者はこの会のことに一節をあてている。この会はまことに著者が京都時代になしとげた最も大きな事業の一つであっ

た。



(送料とも七、九〇〇円、同封の岩波書店払込用紙にてご入手下さい。)

中国訳目録稿 (一)

一 海 知 義
米 浜 泰 英

河上肇（一八七九—一九四六）の著作（単行本）の中

国訳については、かつて次の諸文献がそのリストを載せ、また解説を試みている。

実藤恵秀『中訳日文書目録』（一九四五年、国際文化振興会）

天野敬太郎『河上肇博士文献志』（一九五六年、日本評論社）

同『中国訳目録（単行本）』（筑摩書房版『河上肇著作集』第二巻所収、一九六四年）

一海知義『中国語に訳された河上肇の著作について』

〔同・補遺〕（『中国研究』一九七九年二・三月合併号、同四・五月合併号）

さらに、単行本でなく論文の中国訳については、

一海知義『五四時期の河上肇』（『中国研究』一九八〇

年三月号）

がある。ところでその後、『河上肇全集』（岩波書店、一九八二年（八六年）編纂の過程で新しい資料が発見され、また大島清氏、村上勝彦氏らすくならぬ人々の調査と、中国の関係諸機関の協力によって、いくつかの新しい事実が判明した。岩波書店編集部に集約されたこれらの資料や調査結果にもとづき、ここにまず単行本の中国訳について目録および解題の粗案を作成し、本誌に逐次連載して読者の補訂を俟ちたい。

記載の順序は、おおむね河上の原著の出版年にしたが、訳書には通し番号をうつこととする。

1 経済学研究

一九二二（大正元）年十二月十三日、博文館発行。菊

判、序文三八頁、目次一〇頁、本文四七四頁。なお本書の重刷本が一九二四年九月十三日に共立社より発行された。

① 唯物史観の基礎

巴克訳 一九三〇年三月三〇日初版 明日書店発行
科学的社会科学叢書第一種 目次一頁 訳者序一四頁 本文一一二頁 定価大洋三角五分

一九三〇年九月三〇日再版発行、再版本には発行部数を示し「一一四〇〇〇本」とある。

「訳者序」の冒頭に「この小冊子に収めた文章は、河上肇『経済学研究』のなかの第十三、十四の二章を翻訳したものである。二章の文章はいずれも唯物史観を論じており、本書を『唯物史観の基礎』としたのもそのためである。……」とある。（『経済学研究』の第十三章はウォルトマンの「エンゲルスと唯物史観」の翻訳、第十四章は河上の「唯物史観の立脚点」である）

この文章につづいて、「唯物史観の立脚点」論文の紹介とそれに対する訳者の見解が述べられているが、一四頁に及ぶ長文の序であるため、紹介は割愛する。なお、「唯物史観の立脚点」の中国訳は、冒頭の関一

との論争にふれた前書きを省略し、「一 科学的観察」から訳している。

本書の再版を上海図書館が所蔵する。

2 貧乏物語

一九一七（大正六）年三月一日、弘文堂書房発行。四六版、序九頁、目次一頁、本文三二四頁。

一九一九年六月十日刊の三〇版をもって絶版。のち、『改版社会問題管見』（一九二〇年四月一日）に「八の二」（上・中・下篇のうち下篇のはじめ二節）までが部分的削除・変更を加えた上で、「貧乏物語断篇」と題して収録される。

② 貧乏論

止止訳 一九二〇年七月初版 上海・泰東図書局発行 新人叢書第一種 目次なし 本文五四頁 定価大洋二角

「まえがき」「あとがき」なく、本文のみ。一九一七年刊の原著と同様全体を上・中・下の三篇にわけが、章節に細分しない。③の『救貧叢談』は文語（漢文）訳だが、これは現代中国語訳。表紙および奥付には、「止止訳述」とあるが、本文第一頁には「李鳳亭訳」とする。原著の付図・付表はほとんど省略され、文

章も節略・要約した箇所がすくなくない。表紙裏の広告によれば、「新人叢書」（第一種、第十四種）はトルストイ、タゴールなどの訳が中心。

初版は河上莊吾氏が、三版（一九二三年七月）を上海図書館が所蔵する。

③ 救貧叢談

楊山木訳 一九二〇年二月初版 上海・商務印書館
発行 訳者弁言二頁 目次六頁 本文九六頁 定価大洋二角五分

「まえがき」にあたる「訳者弁言」が訳書の内容・体裁等を示すので、全文の和訳をつぎに掲げる。本文と同じく文語（漢文）で書かれており、和訳は訓読体で示すこととする。

河上肇氏は現に日本の京都帝国大学教授たり、経済学を鑽研し、頗る時望を負う。此の篇、民国五年（引用者注、一九一六年）に作り、初めは大阪朝日新聞に登し、六年三月、始めて単行本に印し、一時、紙、洛陽に貴く、争いて相伝誦し、二年の間、重印すること三十次の多きに至る。嗣いで又た『社会問題管見』改版本の内に転載す。原書に於て刪節する所有りと雖も（原書共に二九五頁、現に刪りて

一三五頁を去る）、而も実質並びに未だこれに因りて減少せず。今茲に訳す所、即ち此の改版本第一版に拠る。

原序中に云う、「人は麵包の爲にして生きず、然れども麵包なくんば亦に生くる能わず、此れ乃ち全篇を貫く所の著者の精神の一なり。経済問題の真に人生問題の一部分と爲り、経済学の真の吾人心に學ぶべしと爲すに足るの学問たるは、全て此れが爲のみ」と。此れを読み而ち著者の本意の在る所を知る可く、余の贅述を俟つ毋し。

本篇、二三の處の重複の故に因りて略予刪節せるを除く外、余は悉く原文に照らして翻訳す。張東蓀先生謂えらく、「訳の事爲る、昔人、三要点有りと謂えり。曰く、信・達・雅、と（信の字に二訓あり、一は原意の真切なるを謂い、一は語法の畢く肖たるを謂う。茲は後義に従う）。其の理想の境は、則ち三者をして其の平衡を保たしむことと爲す。否んば則ち亦た当に達・信をして平均せしめ、而して雅これに次がしむべし」と。余の文、雅馴ならずして、達・信兩者の平均も亦た復た未だ敢て自ら信ぜず。閱者、焉を亮せ。

原書並びに章節の名目なく、乃ち訳者の増益する所と爲り、以て檢閲の便を図れり。附録の一表も亦た他書よりの転録に係る。茲に併せて声明し、以て責任を明らかにす。九年（引用者注、民国九年すなわち一九二〇年）八月三十日

ここにいうように、本訳書は「改版社会問題管見」

（一九二〇年四月一日初版、弘文堂書房）所収の「貧乏物語断篇」に拠っている。ただし原著の「序」は訳出せず、また原著の章節の分け方かなり手を加え（上篇―四章十三節、中篇―三章七節、下篇―一章三節）、各章節に「窮人之意義」「窮困線」等の標題を新たに加えている。「附録の一表」とは、「主要食品之組成及熱量表一」「主要食物之組成及熱量表二」である。

本訳文ははじめ雑誌『学芸』二巻一号―八号（一九二〇年四月―十一月）に連載され、のち一本にまとめられたものである。

初版は北京大学図書館が、三版（一九二五年三月）を京都府立総合資料館および河上莊吾氏が所蔵する。

なお以上②③については、一海知義「『貧乏物語』の中国語訳」（一九八三年法律文化社刊塩田庄兵衛編『河上肇「貧乏物語」の世界』所収、のち一九八六年新評論

刊『河上肇―人と思想』所収）を参照されたい。

3 近世経済思想史論

一九二〇（大正九）年四月十日、岩波書店発行。四六版、序四頁、目次三頁、本文三五七頁。「第四十三版の序」（一九二三年三月）六頁。第四六版、一九二三年七月をもって絶版。

④ 近世経済思想史論

李培天訳 一九二〇年九月一日初版 上海・学術研究會總會發行 学術研究會叢書第一冊「著者序」（河上）二頁 本文一八八頁 定価大洋五角

一九二二年二月一日再版発行、一九二四年十月一日発行の三版にて改訂が行なわれ、「三版序言」が付され、表題も「改訂近世経済思想史論」と改められた。

訳文は文語体。訳者による「三版序言」の和訳を次に掲げる。

「三版序言」

本訳書の発行からたちまち三年が経ち、二版を重ねた。想いおこせば、初版刊行のとき、書中に字句の誤まり少なからず、改めたく思ったが、なかなかその都合がつけられなかった。今年七月、私は上海に行つて法大の新生を募集したとき、同志張藍霄

君と会った。本書三版のことに話しがおよび、字句を改めて遠からず印刷に付することができるよう、張君から依頼された。しかし、私はたまたま校務繁忙をきわめ、ただちには実行できないでいた。いま私は職を辞して南方へ来ており、暇をみては一つ改訂し、その作業を終えた。しかし、私はまた雲南へ戻らなければならなかったために、改訂のことは張君に依托した。他日旧版が新しく生まれかわるとき、再び魯魚の誤り（文字の誤り）を犯して前車の轍を踏むことのないようにしなければならぬ。

一九二三年六月十六日夜　訳者識

本書の第三版を河上荘吾氏が所蔵する。なお、北京大学図書館所蔵の『改訂近世経済思想史論』には「民国十七（一九二八）年十一月再版」と奥付けにあるが、表紙の体裁を除いて、本文は一九二四年の第三版と全く同じ紙型が用いられている。再版はすでに一九二二年に出ているので、新たに版をどこかで改めたものの再版か、単なる奥付けの誤植によるものか、不明である。また、一九三〇年七月三十日発行の第六版を上海図書館が所蔵する。

（以下次号）

……… 編集後記 ……

新緑の頃に届けらるはずでしたが、いまは緑も深まり、梅雨の季節に入ってしまった。

「あやめ草咲きて萎みて且つ咲きて

しほみ果てむ日君と逢はなむ」

六月一五日は「満期出獄」五〇周年に当たります。

「……これで一学究としての義務を終へたものと諦め、此度の出獄を境にマルクス学者としての生涯に終りを告げ、今後は専ら少数の旧友や近親の間に隠居してしまつて、極く穏かに刑余の残生を送りたいと……」

残生一〇年河上は、「一個の老廃兵」と自称し、わたしたちに詩と自伝を与えてくれた。

このたび『獄中往復書簡集』上・下が刊行され、わたしたちに近親、旧友とのあたたかいまじわりを教えられた。六月四日獄中最後の手紙に、「放たるゝ日をば待つ身に暮れなづむ今日の一日も今は暮れたり」と詠む、その心境が伝わってくる。

なお、出獄二日後の羽村氏宛の手紙には、「日本の経済―政治―政治機関―社会運動―等の諸特徴を決定的に支配している」本質が数行で書かれている。（細川記）

昭和六一年度河上肇記念会総会特集

出席者のスピーチより

○司会（大久保） どうもありがとうございました。

それでは、事務局から簡単に報告をさせていただいた後、ご列席の皆様のお話を少しだけ伺いさせていただきますければと存じます。

○大門 事務局から少しだけ報告させていただきます。

現在、私どもの河上肇記念会は、皆さんから会費をいただいで成立しているわけですが、六十一年度の会費をいただいた方が、私の計算では、驚くなかれ四百四十七名おられます。一人三千円ずついただいでおりますから、約百五十万円の収入になりますが、これはひとえに大久保君が事務局、そして大久保君の奥さんが我々の名簿をコンピュータに入れて管理をし、会費を納めておられない方には催促していただいているおかげでございます。今期初めて四百四十七名という好成績を

おさめ、やっと去年あたりから自前で運営することができるようになりました。まことにありがとうございます。ただし、ことは四十周年記念として、大阪の集いの会、京都の集いの会を開催し、大分費用が要りましたので、ただいまのところ余り残っておりません。今後ともよろしくご協力願いたいと思います。

会費をいただいておりますので、一銭一厘まで詳しく会計報告をしなければならないのですが、ご承知のように、私も老境でありまして、後を大久保君なり事務局が継いでくれたときには、一銭一厘間違いのないご報告をするように申し伝えるつもりでありますので、よろしくお願いいたします。実際、自前で運営できましたのは二、三年以後のことでございますので、ここで皆さんのご協力を重ねて感謝いたします。

ことは没後四十周年記念の催しを行いまして、おかげさまで、きわめて盛会にすることができました。これも、河上先生の遺徳のいたすところであると感銘しております。そのせいかどうか、私、毎年物故者の追悼の辞を二、三申し述べる役目をしておりましたが、ことは、会員で亡くなられた方も大分ありますが、おかげさまで、特にご報告申し上げなければならぬような方はおりません。

私はごらんのとおり、やっと二十世紀生まれという老骨でございますが、我々の会員の中には、十九世紀生まれの方々が大分おられます。ことはどうしたわけか、よわい九十歳になんなんとするような方々から熱いメッセージを大分受けておりますので、簡単に披露したいと思いません。

先ほど米浜さんのお話に出てきました寿岳文章さんは、ことしの五月のときにコメントをいただきまして、二十四号の会報に載せさせていただきました。

それから、我々の前の世話人代表であります住谷悦治先生——この先生はもう九十歳でございますが——からのを読ませていただきます。「河上記念会の発展を心から祈り上げます。私は老齡の極致で、出席ができず、残

念至極です。私は生きていく限り、貴会の発展を期待し、心を通わせています。河上先生の学恩は大きく重く、寝たきりの我が心の励ましになっております」。

次に、脇村義太郎先生です。「春の会合にはぜひ出席いたしたいと考えておりましたが、健康が許さず、欠席をいたしました。秋は経済史学会の総会があり、発言を求められておりますので、残念ながら今回は欠席いたします」。

それから堀江邑一という、これまた偉い先生ですが、この先生はまだ大変元気で、ことし招かれてソビエトへ行っておられました。「レーニンがシベリア流刑中の大著「ロシアにおける資本主義の発展」を書いたシュエンスコエ村を訪ねたりして、極東ハバロフスクを経て新潟へ帰ってきましたが、非常に疲れて、八月いっぱい横臥、今日ではすっかり回復はいたしました。もう京都まで出かけられませんので、お集まりの皆さんにどうぞよろしくお伝えください」とのことです。

それから、四国におられる八十九歳の三浦文一さんからもお手紙がございまして、「会報二十四号を拝受しました。特集「没後四十周年記念の集い」各先生方のお話で、河上博士の高徳をしのびました。特に老生は、一海

先生の『河上肇と中国の詩人たち』でたくさんのご啓示を賜りました。と申しますのも、一海先生の好著『河上肇詩注』一九七七年十月二十日第一版発行を十一月四日に入手いたしました。そしてこの十年間、机辺に備えて、繰り返し繰り返し拝読してきましたので、感激ひとしおでございます」。

また、我々の大先輩であります小林輝次さんからも、皆さんによりしくということということで、以上十九世紀からの皆さんに対するメッセージでございます。

(笑・拍手)

ここにおいでになる方は、相当老年の方が多いのですが、まだ我々よりも老年が熱い思いを河上肇記念会に寄せていただいているということで、感謝の至りであります。また、ここにも井関先生という、これまた十九世紀の方がおられますが、(笑)後でお話があると思います。

それから私事ですが、河上肇会をお世話いただき、「テレビ評伝・河上肇」の最後を飾っていただいた安井さんという方が昨年亡くなられて、きょうは来ておられますが、塩田庄兵衛さんと岡部伊都子さんと私の三人で、「安井さんをしのぶ会」をやるんじゃないかという話が出ております。まだ具体的にはしておりませんが、呼び

かけたら参加してやろうとおっしゃる方がございましたら、先ほどお渡ししたアンケート用紙に、その旨書き添えていただきますたら、大変幸せに思います。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

○司会 先ほどからいただいているお酒とお配りいたしました進々堂のパンは、例年のごとく山下孝次郎さんからいただいたものです。また、リンゴは今さっき届きました。長野県の立科町にお住まいの両角康則さんがこの会のために送ってくださったものでございます。それから、去年はちょうど会の日に当たりまして、去年ご出席の方々は召し上がったかと思いますが、山梨県の甲府にお住まいの今井民子さんからブドウを送っていただきました。このように会員の方からいろいろな厚意を寄せられているということで、お礼を申し上げたいと存じます。

早速、ご出席の皆さんのお話を伺いたいと思いますが、時間が余りございませんので、最初に、十九世紀からのお話ということで、井関さんにお話を伺います。その後、私、きょう初めてお目にかかります愛知県の安城からお見えの佐藤直介さん、高尾さん、敦賀さんと続いてごあいさつをいただきます。その後、先ほどお話に出ました安井さんのご子息の森田さんがお見えでございますので、

多分きょうの会にも、安井さんの手引きでこの会と縁を持っていたけりようになつた会員の方々もいらつしやると思いますので、ごあいさつをいただこうかと思つております。

○井関　私は、十九世紀の最後の一九〇〇年に生まれまして、河上先生の「経済原論」を聞きましたが、これを聞いた方はもう少ないだろうと思います。私は、在校中は京都大学講演部におりまして、講演部長が河上先生で、その講演部の打ち合わせのためにお宅に伺うたこともあります。

そういうことで、特に河上先生を尊敬しているものがありますが、私は河上先生の全集ではなく、著書を古本あさりのついでに集めておりまして、河上先生の本が出た当時の著書はほとんど集めております。一番古いのが、明治三十八年読売新聞社発行の「社会主義評論」であります。

河上先生の本の値段は、余り上がりもせず下がりもせずで、大きな菊判の部厚い本で二千八百円ぐらい、四六版なれば千円台です。岩波文庫のようなものなれば三百円か五百円ぐらい、自叙伝で五冊五百円ぐらいであるだろうと思います。

私が手に入れた本では、「社会主義評論」が一番高く、四千円です。これはなかなか出ません。明治に出た本は、河上先生の本もなかなか出ませんが、大正以後なれば、古本屋に時々出ます。京都の値段がやはり地元で一番高く、大阪や神戸で買えば安く買えるという事情です。

筆跡はどうかといいますと、私は古書店の方から目録を送ってもらつておりますが、数年前に、河上先生の揮毫の色紙が五万円でした。今少し上がっているだろうと思います。

七言絶句の大きい立派な軸物が七十五万円、ちょっと引けぬかと言つたら、先生、七十万円にしか引けませんわと言つたので、ちょっと考えていたら、よそへ売れたと言っていました。これは京都の値段です。

東京では、河上さんの本は京都よりは安いですが、字も安い。河上さん揮毫の七言絶句が三十万円出ておりましたので、申し込んだけれども、抽選はずれで手に入りませんでした。

そういうことで、河上先生の揮毫も、機会があれば何とか手に入れたいと思つていましたが、最初に手に入れたのは、たしか河上先生が信州へ疎開するということで、

懇意にしておられた方へ送られた手紙で、戦争末期、亡くなられるちょっと前ごろに、嵐山や苔寺の歌を歌って、それを六首書いて送られたものです。

もう一つは陸放翁の詩です。これは河上先生が非常に好いておられて、「陸放翁鑑賞」という本を上下二冊であらわしておられますが、それを書かれた色紙を手に入れました。それは「心は已に斯の世を忘るるも、天は猶お此の翁を活かせり 庸辰過日陸放翁の句を録す 河上肇」と書いてあります。一海先生の著書によると、この句は河上先生が義弟の末川先生に書かれたもので、これが私のところに回ってきたということです。

そういうことで、河上先生の筆跡や著書を集めようと思っておりますが、なかなか集まりません。著書はほとんど集まりましたが、筆跡は切りがないですから、また機会があれば手に入れたいと思います。

今、大門さんから四百何十名の会員と言われまして、多くおられてまことに結構と思いますが、きょう来られた方を見ると、老人会のように見えます。(笑) 老人会は、若い者があって、後を補充すれば続きます。町内の老人会は、若い者が皆老人になるので絶えることはありません。ところが、河上会は若い者が入ってくれなければ

ばなくなってしまう。(笑) 近ごろどうして若い者が河上会に入らないのか、一遍大門さんに四百四十七名の年齢表を会報に載せてもらったら参考になると思います。

これは、私はマルキシズムの凋落だと思っています。今、政党でも、皆さんご存じのとおり、社会党は、社会主義の道ということでマルクス・レーニン主義を掲げておりましたが、去年、石橋委員長が新しい社会党——ニュー社会党にするためにということで、マルキシズムを社会党の綱領から抹殺しました。そして、マルキシズムを掲げている向坂逸郎先生の社会主義協会の党員の当選率が非常に悪い。今度の衆議院でも、落選者は社会主義協会が一番多い。なぜかという、若い者がマルキシズムによう入れぬわけです。

なぜそうなったかという、世の中が非常に落ち着いて生活が安定し、若い大学出が就職難も何もない。我々が出た大正末期、昭和の初めというのは、大学出たって就職がなかったんです。京都大学を出て、中学の先生になるのにも苦労したんです。そんな時分と今とは違いますがね。失業率が二・七％が八％になったら失業率が上がったなんて新聞にでかかど書いているようなよい時代ですから。

それで、若い者がマルキシズムに興味を持たぬ。したがって社会主義的な本が、古本でも新本でも売れ行きが悪い。この間も、梅田でそういう本ばかり売っていた本屋が倒産したと新聞に出ていた。

それなら、河上さんは社会主義を掲げて、マルクス・レーニン主義をやったからあかんかという、そうではないと思う。河上さんは、マルクス・レーニン主義だけで人に慕われているのではない。先生はヒューマニストである。ヒューマニストであるからこそ、田中正造の演説を聞いて、オーバーから服から皆投げ出した。その上、今度は無我苑に飛び込んで、ゼロになってしまった。マルクス・レーニン主義は最後の主義であって、先生には一貫してヒューマニズムというものがある。ヒューマニズムは、資本主義、社会主義とともに貫いて、人間が愛し、助け合うて生きていくところの主義であります。それが河上先生の手を貫いているということを若い人に理解してもらって、大いに河上記念会に入ってもらおう、皆さんにご協力をお願いします。（拍手）

○佐藤 経済学とは全く関係のない愛知県の高校教員です。大学時代に、先ほど話の出ました岩波文庫の「貧乏物語」という本を読みました、大変わかりやすく記

憶に残っております。

その後、何かの関係で自叙伝を読みまして、井関先生の話にもありましたように、河上 肇の人物、生き方、強烈な個性、何とも言えぬ正直な人間性に変りかえり、その後出た全集も予約しましたし、河上会にも入らせてもらいましたが、単なるファンです。

法然院には谷崎潤一郎や九鬼周造、その他有名な方のお墓があるということで、数年前に観光で来たことがあります、河上 肇の法事のときに一週来てみたいという念願がかなって、初めてことし出させてもらいましたが、あいさつまでさせていただいて、まことに恐縮でございます。

先ほどから余り読まれぬということを言われますが、僕は教員をやっておりますので、授業のときは彼の話をしたり、彼の文章が素晴らしいことなど、生徒にはいろいろと話しております。やはり人間性というところで、たとえ経済が専門じゃなくても、きっと彼はみんなから読まれるんじゃないかと思えます。

大変簡単ですが、失礼します。（拍手）

○森田 大門先生並びに司会の方からご紹介いただきました安井功の娘婿でございます。

私は、十年か十二年ぐらい前に、何度か河上会に寄せていただきましたが、最近はずっと体が悪かったもので、寄せてもらっておりません。初めは、女房の父の関係で無理やり連れてこられまして、何度か参加させていたでいて、それから河上先生の本も少し読ませていただくという後先のないようなことでした。

先ほどご紹介ありましたように、実は、父が昨年三月二十五日、自分で自分の命を絶つというような形で亡くなりましたので、それもあって昨年は寄せてもらえませんでした。ことしもずっと寄せてもらってなかったのですが、先日、大門先生にお会いしまして、父のことで一度そういう会を考えているというお話をいただきましたので、きょうこちらに参上したような次第です。

話があちこちしますけれども、私が女房と会ったのは一九六九年で、当時私は、反戦青年委員会というのをやっております。先ほどマルクス主義凋落の話をしておられましたけれども、我々も当時はそういうことをやっております。実は、京都大学の入試阻止闘争が始まって、それで私の今の女房が捕まりまして、おたくのお嬢さんが捕まりましたよと家に言いに行つて、縁ができて結婚したのですが、(笑) そのとき安井の父は惘然たる

表情をしておりました。

その後、末川先生とか大門先生、あるいは岡部伊都子先生なんかと一緒に月見の会をしたりとか、何だかんだと関係を女房の父がつくつてくれて、それでこちらの会にもご縁ができたようなことです。

もしそういう会を催していただけたら、非常にありがたいし、ひょっとすると、安井は彼岸から独特の話ぶり、身ぶりで頭をかいて恥ずかしがっているかわかりませんが、よろしくお願いしたいと思います。(拍手)

○司会　ことしの四十周年記念、全集完結の会の大阪での記念集會に初めてお見えいただきまして、そのつながりからきょう初めてお見えいただきました上山さん、木本さん、お二人のどちらかにお話を賜ればと存じます。

○上山　昨年、新聞で河上先生についてのお話の会があるということで、出席させていただき、大変感銘を受けただけでございます。このたび、その縁でご案内状をいただきました。本日参りました。

木本君というのは、私の中学時代の友達です。彼は、小泉信三先生の慶応での弟子ですが、河上先生を平素から非常に尊敬しているということを聞いたものですから、

僕はこの会に行くが、君、行かないかと言って電話をしたら、ぜひ一緒に連れて行ってほしいというので、本日参った次第でございます。

○木本 私は、河上 肇先生を批判された小泉信三先生に学びましたが、小泉先生は河上先生の話随分理論的に話されました、よくわかりました。先生ご自身は、河上先生の人格、人柄、教導的なものを非常に尊敬され、また河上先生の文学性をよく引用されました。

私は『貧乏物語』、それから、小泉先生に言われて『資本論入門』、最後の『自叙伝』の三つしか読んでおりません。『貧乏物語』は古色蒼然たる感じですが、それでも今の近代経済学の理論構想と非常に似た、均衡理論に通ずる面を感じます。『資本論入門』では、文章が非常におもしろくて、例えば小泉信三がひとしきりさえずったというような箇所もあり、おもしろかった。『自叙伝』は、人間河上そのものといえますか、非常に尊敬を感じました。

きょう墓前に参りまして、戒名のないご夫婦の墓石を見て、人間河上先生の真髓に触れたような感銘を受けた次第でございます。(拍手)

○上山 ただいまのが私の親友の木本君の考えでございます

ます。

私自身は、若いころ、例えば河合栄治郎さんとか、美濃部達吉先生とか、そういう当局から弾圧を受けた先生に非常に興味を持ち、また尊敬を払ったものでございます。そういう面で河上先生を注目し、また尊敬させていただいた次第でございます。

国から申しますと、私も山口県でして、河上先生と同じ国でございます。

余談になりますが、その当時、私の分家のおじさんが政府の高官をしておりましたが、山口の高等学校で河上先生と同期でした。そのおじいさんは台湾総督をやり、後に枢密顧問になりましたが、そのおじいさんの伝記を読みますと、河上先生が監獄におられたときに、友人としてお見舞いに行った。時の政府の高官が監獄に行つて、河上先生を慰めたということが載っております、そういう面でも非常に興味もあり、また親しみも感じます。

先ほどヒューマンイズムというお話がございましたが、河上先生は単なる経済学者ではなく、非常に純粋な温かい人であり、特に文学性があるというところに親しみと尊敬を感じている次第でございます。

どうもご清聴ありがとうございます。(拍手)

○司会 きょう初めてお見えになったのじゃないかと思いますが、お二人の女性をこの会に招待いたしました。岸本さん、ご婦人の方々をご紹介いただくとありがたいのでございますが。

○岸本 我々は、大阪で漢詩に親しんでいる者で、特に陸放翁の詩——これは李白や杜甫、蘇東坡に比べてかなりやさしいと思いますが——を学んでおります。

紹介します。赤尾さん、佐竹さん、川方さんです。

(拍手)

余談になりますが、陸放翁と河上 肇は、大変よく似ていると思います。「比の身合に是れ詩人となるべきや未や」とか「稼軒筆を落とせば……」の詩韻氣質等、また、陸放翁も説を曲げたというので、人々から非難されるところがあります。河上先生も説は曲げてはいませんが、監獄にいたときには疑惑の的になったらしいです。そういうことから、陸放翁に興味を持ち出した次第です。

(拍手)

○司会 そろそろ時間もなくなってきましたが、沼津からお見えの松本さんに、一言お話をいただきたいと思ひます。

○松本 私は主人が亡くなりましたして、主人の遺言で、今

日まで河上会に参加させていただいております。

主人は、河上先生に助けていただいた時期がございまして、それからずっと先生を慕って、八十八歳まで生きている間じゅう、一年のうち何十回も、だれにでも、河上先生というのはこういう人だとよく話をしました。

六十五歳で考えるところがあって、これから来る時代は年寄りの時代だからということで、自分の持っているものを一切投げ出して、皆さんから寄附を仰いで、革新的な老人ホームをつくりました。今、一人四畳半一部屋の個室にありますが、そこに自分が理事長になっております間じゅう、本当に何もわからない人に、河上先生はこういう人でこうだったと、事あるごとに聞かせるものですから、私がここへ来ると、「河上先生のところへ行くと、法然院のおせんべいがもらえるんだね、奥さん」と、いつでも楽しみにしているんです。

先生のまねごとなんでしょうけれども、貧しい人、子供が亡くなった人、または共産党に入ってどこかへ行っていないなくなった人のお母さんとか、そういう人たちを今入れております。

主人が亡くなりました後、引き続いて、私の生きている間は主人の遺言を守って、命ある限り毎年河上会に出

させていただこうと思っております。

私は無学で何もわかりませんが、主人から、五十年一緒にいる間じゅう河上先生の話を聞かされました。主人は、もし河上先生のような方が共産党にいたら、どんなに共産党は前進したかわからない、人間はうそをつかないこと、貧しい人に対していつでも心を配ること、それだけが足りないと言います。河上先生がああいうふうにお出になってからいろいろな紆余曲折がありましたけれども、もし共産党が立派だったら、きっと先生はずっと共産党にいてくれたであろけれども、至らないからしょうがない。おれたちだけでも先生のまねをして、貧しい人に一生懸命尽くしていくよりしょうがないだろうということ、引き続いて、今老人ホームをやっております。

そんなことぐらいしかお話しできませんけれども、どうぞよろしく願います。(拍手)

○司会 哲学者で、この和尚さんをしていらした橋本先生についての冊子をお寺さんからいただきました、皆様にお配りしましたので、ご紹介します。私は無学で、この著者のことについて全然わかりませんけれども、読んでみたら、きっとおもしろいことがあるのではないか

と思います。

最初に杉原先生のお話にありました山口の河上会の人たちが、今度のローカル誌に河上肇特集ということで、皆さんがそろっていろいろ書かれたものをここで紹介しておきます。

○大門 これで閉会にいたします。寒い折から、皆さん気をつけてお帰りください。

それからお帰りの節に、事務局からお願いしているアンケートにご遠慮のない意見を書いていただきまして、出口でお渡しくださいますようお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございます。来年もどうかよろしく願います。



「宗教的真理」と「科学的真理」の 統一的理解について

佐藤 克己

一マルクス主義者では、とらえられない広大な面を持つているのが河上像ではないかと思えます。河上先生のような偉大な人物像をとらえるには、その全生涯を通じて、いちばん、その人格・思想の重点が発揮せられているような作品を通じて、その全体像をとらえるのが、いいのではないかと考えます。

「自叙伝」を別格として、河上先生の論稿のうちで、先生御自身「これは私にとって、中々大切な原稿である。」と書き遺された「余が懺悔と余が信念」のなかに、先生の終生の課題だった「宗教的真理と科学的真理の統一的理解」を継承していくべき、なんらかの端緒を見出せるのではないかと考えていますが、事はなかなかの大事業で容易ならざる問題ですが「神学」にも関係してくるので、少しばかり、最近、身边で起こったある神学助教授の昇格に関して審査論文を聞いての感想ですが、その論

文はテイリツヒとホッブスをテーマとしての「世界の総合的把握が主題ですが、テイリツヒの「哲学と神学の相互呼応の方法論」はいいとして、ホッブスのように「経験の集積」だけでは「世界の総合的把握」は不可能だと思えます。

ベルグソンのような「本質直観」によるか、あるいは「叡知」によって……つまりアプリ・オリなものを認めなければ、とらえられないと考えます。

「科学的真理」にしても、それは「法則」の形で現わされるわけですが、例えば「客体は法則に従って動く」というアプリ・オリな前提がなければ「法則」じたいが成立しない。それに「客体世界で生起する事実」が「法則」に合致しているか、どうかを検証する「法則」じたいがそのとき、そのときで変る（経験的法則は変動し易い）ようでは、検証する基準すらないことになる。

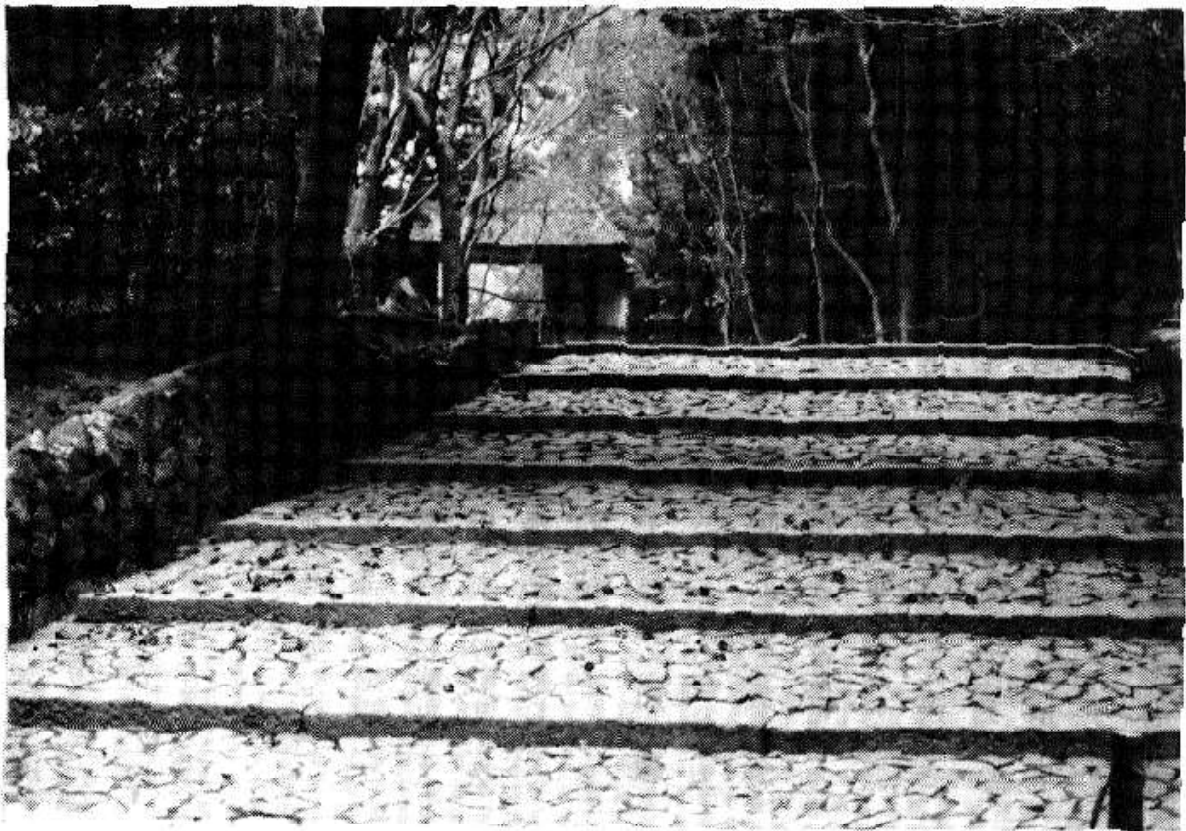
したがって「科学的真理」も、アプリ・オリなものを認めなければ成立しないし、「形而上学」である「宗教」も成立しない。

しかし「宗教」は厳然として成立しているのであるから、この「現実」から逆に「根源」に還元して、それは形而上学、したがってアプリオリなものを認めていることになる。（詳しくは拙著「総合科学への道」3の第二章参照）

ここに「科学的真理」と「宗教的真理」（私の考えでは宗教的真理）との統一的理解の基礎があるのではないかと思います。このぐらいいにしておきます。

法然院における総会スピーチでお話ししようとした要旨をまとめてみました。

個人の事にふれた部分は話のなかでこそ生きていますが、原稿では省いた方がいゝと思います。陽明学の実践的性格についての大塩中斎——河上肇——三島由紀夫——吉田松陰はこの原稿では省きました。『孤鴻万里』に所収。



会 員 通 信

一九八六年度総会案内の返事から

(抜粋：事務局 紀平龍雄)

(一) 出席予定

会報と総会のお招き状ありがとうございます。ございました。通勤の朝、薄紅の芙蓉の花を眺め、百舌の鋭い鳴き声を聴きつつ、非力なりに日々をいちにちに勤めて、本年も法然院詣ができ、先生方のお話を拝聴できそうだと感謝の気持ちでおります。

福岡市 麻生 泰一

いつもお世話になります。夏バテの為、少々体調をくずしておりますが、まだ日もありますので一応出席とさせていただきます。

池田市 相沢 実子

御世話下さる皆様、有難うございます。私、三年ほど前から漢詩の御勉強をはじめ、河上先生を知り胸を打たれる思いをしておりました。処好文倶楽部にて一海先生にもおめにかかれ、お人柄に接して心暖まる思いを致しました。何卒今後ともよろしく御指導をお願い申し上げます。

大阪市 赤尾 鷹子

河上没後四十年・全集完結記念のつどい京都・大阪両会場の講演を聞き恩師河上先生を思ひ、事務局代表大門英太郎氏の御高配感謝します。なお会報二四号表紙の右つどい写真下葉前列中央に小生の黒背広姿が写っております。会員は老人が多くこれでは年とともに先細りなるおそれがあるので、河上肇を慕う若い会員をふやすようにして頂きたい。

豊中市 井関 安治
(事) 全く同感です。まず会員一人一人が身近な若い人に語りかけていくのも大切かと思えます。

会報二四号拝見いたしました。いつもながら編集の御苦労、感謝しております。十月の集りでは米浜さんのお話を楽しみにしており、また久しぶりに秋の京都の散策を楽しみたいと思っています。

神戸市 一海 知義

五月には立命館のホールでよいお話をお聞かせいただき、非常に喜んでおります。大阪でのビデオとお話にも出席しようと思いつながら所用で行けず残念でした。法然院へお参りするの初めてですが、何とか今年こそはと念じています。

奈良県生駒郡 上野 晃

河上先生没後四十周年と全集完結の記念集会の会報拜見、大阪での集会の折は北陸方面に旅行中で参加できず、大変盛会であったことを喜んでいきます。来月の総会には久方ぶりに出席させて頂く心積りでおります。大正一三年頃京大で先生の講義に接してから六十年以上経ちましたが、いつも和服でのお姿がいまも彷彿といたしております。

堺市 尾形繁之

十八日の晩に岩国で同窓会がありますので、十九日は少し遅れるかも知れませんが出席します。

寝屋川市 沖本 彰

(事) しかし残念ながら当日は欠席。懐かしい旧友との語らいで少しピッチが上がったかと事務局は拝察いたしました。

昨年の総会後、京都府立資料館での先生の遺品展・並びに没後四十周年記念集会は京都・大阪会場とも参加でき喜んでいきます。最近読みました物に「本、そして本、読んで五十年」(杉浦明平)に河上肇論があり、一層先生を理解するのに参考になりました。今回は米浜講師の「新聞にあらわれた河上肇像」を大いに期待しています。

堺市 小田 正大

白紙で提出するのモットイナイので思い浮かんだことを申し上げます。私は八十四歳の老人で少しばかりボケています。昭和三年(カゾエドシ二十七歳の時)東大を出た新任の友人(既に故人)に薦められて河上先生に一票を投じたことがあります。これも最近まで昭和二年のこととばかり思っていました。その後、

戦中・戦後も全く無関心で毎日の暮らしに追われ、講義に追われていましたが、昭和二十八年から十年余、兼職に学生部を担当することになり、学生に負けまいと河上先生その他の訳本を読みました。その代わりか、専門の方は全く遅れてしまいました。

京都市 軽部 末蔵

(事) ボケるなどとてもとても。誰かが言っておられました、「河上肇運動はボケよけの特効薬」と。それにしても先生はお元気で、当日は奥様同伴で自宅からタクシーをはりこんで来て下さいました。

もちろん出席です。当日を楽しみにしています。

高槻市 紀平 龍雄

私が河上思想に傾倒し始めたのは昭和二・三年ですから今日でかれこ

れ六十年、一マルクス主義者だけでは捉えられない宏大な面を持っているのが河上像ではないかと思っています。

第二貧乏物語などは硬直した公式論を宣伝しているだけで河上色など全然なく、無味乾燥なスターリズムではないかという感想さえ持った不出来な作品だったという記憶が残っています。やはり河上色濃厚でこそ澆刺として生氣に充ちた偉大なる作品（社会主義評論・貧乏物語・人生の帰趨・予が懺悔と予が信念）が産まれるのだらうと思います。この四つの論稿こそ「死後若し著作集刊行のことならば、それに入れて貰いたし」と先生が指示して逝った通り、河上肇を不朽の人たらしめる最高傑作だと思います。それに「詩篇」はすべて最高傑作に入れるべきものと考えます。右の四つの論稿を統一的に関連づけて、その思想像を造型しては

どうかという感想を抱くこと一ケ年、まだ着手できないで、とかく時日を徒過しています。

東京都 佐藤 克己

草叢に集う虫の音に漸く秋の風情を感じる頃と相成りましたが、大門様始め事務局の方々の御苦勞、心から御礼申し上げます。紅葉に彩られた法然院の墓参りと総会に於て会員様方の大変有意義なお話を拝聴することが今では唯一の楽しみとなりました。河上肇が現在の世相に対してどう対応するだらうかという事が愚生が一番の関心事であります。先日も恩師御夫妻と法然院に詣りました。

枚方市 佐田 季男

二つの記念のつどいの特輯号として出る会場の表紙は、そのつどいの写真でかざろうという大久保氏の提

案通り、第二十四号の表紙には、五月二十四日の大阪でのつどいの時の写真（壇上とフロアの）がのっている。これを見て私は当日の会場で感じた熱気をはっきりと思いだした。写真で表紙をかざったのは成功だったと思った。

西宮市 杉原 四郎

いつも何かとお世話さまでございます。私も今年三月末で京都大学医学図書館を退職致しました。引き続き図書館関係の仕事を続けてはおりますが、今までの随分多忙でした日々から思いますと、少しは時間的・精神的に余裕ができてきたようでございます。今後は河上先生のお集まりにもなるべく参加させて頂きたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い致します。

京都市 内藤 昭子

秋たけなわの時、総会に当たって、戦時中の河上先生の心情を一海先生の河上肇詩注を読み返し、その孤独・連帯・確信の心中に思いをはせて墓前に拝跪する機会を与えて頂く事を感謝しています。

神戸市 葉 抱 武三郎

毎度お世話を賜り有難うございます。今年も法然院さんで皆様のお話を楽しみにしております。

堺市 広 岡 正 治

只今のところ十月十九日(第三日曜日)は先約があり欠席のほかありませんが、変更がありそうな気がします。出来るようになったら法然院へ参ります。

西宮市 松 本 広 治

初めて参加致します。本会入会の

動機は記念集会で講師の方々のお話を伺ったことでした。まだ何もわかりませんのでよろしく願います。河上肇については以前から興味を持っており、彼の生き方・生活に引き付けられ関心を持って来しました。全集も一応揃えましたが、まだ「つんどく」になっています。私にとって「第二貧乏物語」と「自叙伝」・「資本論入門」から学ぶ所が多かったように思います。

大阪市 山 田 一 美

会報二十四号拝承しました。米浜さんの話はぜひ拝聴したいので、当日は何とか体調の許すかぎり出席したいと思います。五月の京都・大阪での記念の集いに出られませんかでしたので、その埋め合わせをつけたく急しております。幹事役まことに御苦勞様です。

吹田市 山 下 肇

何時のまにやら秋のこの一日をお詣りすることが例になりました。會員など何の資格もない私なのにとおかしい思いがいたしますが、博士の清潔なご一生をたいせつに思うだけでお墓にお伺いする気持ちになります。よろしく願います。

神戸市 曾 我 ま り

(二) 会報について

会報二四号、有難うございました。今号は内容は言うに及ばず、ボリュームからしても読みごたえがありました。次号はもっと面白くなるでしょう。

徳島市 中 谷 武 雄

会報に掲載されています五月

の「つどい」のさいの講演の記録、どなたの方のものからもういろいろと教えられ、感謝しています。しかしそれにしましても、私たちはいま河上先生から何をどう学ぶべきか、このようなことをみずから自問自答しながら、改めて考えさせられているような次第です。

京都市 岡部 利良

内容の充実した講演を再び文字で拝見することができて感謝であります。近年、恒例の記念会は欠かしたことがありませんが、今年は近親の結婚式と重複、残念ながら欠席いたします。

奈良県生駒郡 山崎 宗太郎

会報二四号、拝受いたしました。先生の没後四十周年、全集完結記念のつどいの模様を詳細に知れ、あり

がとうございました。この八月に転居をいたしました。旧居と同じ横浜市内ですが、逗子・横須賀両市に接する南のはずれです。

横浜市 宮坂 宏

記念会会報、楽しく読んでいます。今年には出席させてもらうつもりでしたが、最近少し体調をこわし欠席します。会の成功をお祈りします。

茨木市 岡橋 穠

会報二十四号は、記念のつどい大阪会場に出席し感銘を受けました諸賢のご講演の内容の思い出と感激を新たにしました。それで遠近の知友に呈送したいと思いますので十日程御送り下さい。

河内長野市 藤木 福太郎

おとどけ頂いた会報No.24は九分通

り目を通しました。岩井さんに特に啓蒙されました。

京都市 和田 洋一

特集Ⅱ河上肇没後四十周年・全集完結記念のつどいⅡ各先生方のお話して河上博士のご高徳を偲びました。特に老生は一海先生の「河上肇と中国文学」でたくさんのご啓示を賜わりました。と申すのも先生のご高著「河上肇詩注」を入手して十年机辺にそなえ、繰りかえし繰りかえし拝読して来ましたので、感無量なるものがありました。

徳島市 三村 文一

今回の会報、大変興味深く読ませてもらいました。従って次号が待たれます。かつての会報で同じ会員が先般の西部地震の震源地に近い山深い山村に所在してられる事を承知

し、以来面接の機をうかがっておりましたが、今夏お訪ねお会いする時を得ました。お元気にいらして再会を楽しみにしております。この会の存在意義を改めて思い知りました。

長野県安曇郡 平井重男

会報二四号、楽しく読ませて頂きました。昔も今も誠実な人はたくさん居られるのだから、きっと若い人達も河上肇先生のことを知り、自らの心の糧とするでしょう。立派な全集にたくさんの人達が御苦労なされたことを厚く御礼申し上げます。

京都市 鮎子田泰生

会報二四号を読み大変感動しました。京都も大阪も予想を上回る参会者だったとのこと、うれしく、また力強いことであります。岩井・杉原・一海先生のお話はどれも味わい深

く、胸をうつものがありました。総会は欠席いたしますが、「記念のつどい」に劣らぬ盛会でありますようお願いしております。

横浜市 高桑末秀

会報二四号所収の岩井教授「河上肇と天皇制」大変興味深く読ませていただきました。

東京都 上杉捨彦

いつも欠席ばかりいたしておりまして申し訳ございません。会報を読ましていただき乍らいろいろと、当日の模様等を考えたりしております。

私は「河上肇全集」を手許にもち乍ら、未ださっぱり勉強いたしております。大変お恥ずかしく存じます。

市川市 芳賀守

会報にはいつも啓発されること多

く、愛読させて頂いております。

奈良市 藤沢 彬

(事) お世辞にでも会報のでき栄えをほめていただきますのは、事務局・編集子を喜ばせてくれます。今後、も注文を含め、感想をお寄せ下さい。

㊦ 記念集会のこと

一海先生の実にわかりやすい講演に終始感動致しました。河上肇先生の人となりにつれて良き日であったと感謝します。

西宮市 山本格也

体調不良のため今年も総会に出席叶わず、実に残念です。去る五月二十四日の大阪に於ける「記念集会」には出席。参会者が会場に溢れるほどの盛況に接して「河上肇の炬火未だ消えず」の感に打たれました。一

海和義教授の講演「河上肇と中国文学」を感銘深く拝聴致しました。なお今回の会報に掲載された京都集会に於ける杉原四郎代表世話人殿の講演「全集にみる河上肇の人間像」は、河上先生の人間像をあらゆる角度から詳述下さって誠に有難く、充分に納得されるものでありました。

西宮市 石井公代

今年は出席……と思っておりますのに、またまた支障を生じ残念ながら欠席いたします。すまなことです。没後四十年の大阪会場も盛況でよかったですね。

京都市 稲田素臣

京都・大阪二会場の盛大な記念集会の様子を拝読し力強いものを感じております。杉原・川勝・一海先生方の論稿に接し、新しく河上先生の

偉業を偲んでおります。小生すでに老残、家をあげられない事情もありまして残念ながら欠席いたします。

東京都 金子 楽

本年五月、大阪の記念のつどいのあとの懇親会での話題の一つ「もし河上先生が健在なら、どんな学問的ないし政治的立場に立たれるだろうか？」は学問的には全く無意味に近いテーマですし、本会としてはもちろん結論を出すべき問題ではありません。しかし河上肇の生涯に照らし、私自身がどんな生き方をすべきかは、すべての会員が厳しく自問自答すべきものと思えます。

徳山市 脇 英夫

没後四十周年の京都・大阪の行事の成功に感銘を受けました。十月十九日は学会出席の委任がありますので、

余儀なく私としては異例の欠席を致します。

京都市 塩田 庄兵衛

敗戦直後のあの輝しい民主化運動も最近では旧勢力の実に巧妙な世論操作と暴圧的な指導によって、民主主義の重要な勢力である労働組合の弱体化、それと共同戦線をはるべき市民運動も低迷化して来ております。このときに当り河上先生を偲ぶことしきりであります。それにつけても五月二十四日の大阪集会では、会場に入れぬばかりの大盛況で、この現在においても心ある人がこんなにも沢山いることを知り、本当にうれしく思いました。一人でも多く会員を増やし、今を益々盛大にいたしたいと思っております。

豊中市 後藤 嘉七

四 法然院

一期一会。先生のお墓参りをかねて、一度総会に出席したいと念じながら今年も行けません。

東京都 大島 久治郎

時折上洛の節にはできるだけ機をつくり、法然へ墓参らせていただいています。今年は二度ほど法然院を訪ね、いずれも初めての同伴者を帯同いたし、あらためて感慨を深くしたと喜ばれました。

岡山市 岸 本 竹 志

一昨年秋、法然院の河上肇先生の墓にはじめて参り、大変感動致しました。お寺の庭の紅葉が美しかった記憶があります。岡山で「社会運動史研究会」というのをやっておりますが、その初代会長で旧労農党中原

健次先生（故人）は河上先生の「貧乏物語」に感激して社会運動をはじめられた方で、河上先生のお手紙や本などをいくつか持っておられました。今、家族の方にそのゆくえを探してもらっています。

岡山市 坂 本 忠 次

冷水摩擦をし、灸をすえてから散歩に出かけます。五時三九分発二〇三系統のバスに乗り銀閣寺道で下車、哲学の道を歩くのです。河上肇の墓も表敬訪問致します。白川に架る西田橋を渡ると桜のトンネル。その横を若王寺取水場に発した疎水が流れています。その流れが止まっています。それを見て思い出しました。五十数年前の新労農党樹立をめぐる論争を。

新労農党を創るのは間違いだという意見があって喧々器々たる非難攻

撃にさらされました。河上肇らは敢然として反駁の論陣を張り、意見を開陳しました。「流れる水は腐らないが、澱む水はくさるのだ。だから水の流れをよくすることは、新しい党を創ることは必要なんだ」と。当時の私はマルクス・ボーイで難しい理論は（今でも）判らないながら非難する側に付和雷同していたのですが、この弁には説得力を感じないではいられませんでした。

京都市 児 玉 誠

先々代の貫主梶田信順師を訪ねて、はじめに法然院の山門をくぐってから二十年をこえる歳月がすぎました。師の御案内で河上肇の墓前に立ち、お土産に歌碑の拓本をいただいて帰ったあの日の感動を今も忘れません。その梶田氏も遷化されてすでに久しく、また近くは墓守りのようなお仕

事をしてこられた安井功氏が他界され感慨無量です。

日野市 上木 敏郎

八月一五日、家内とともに法然院を訪れ、墓参させていただきました。おかげ様でなんとか元気に過して居ります。

寝屋川市 杉村 敏正

会に一度も出席したことがありませんが、会報を楽しくよませて頂いています。京大医学部学生のところ（昭二〇（二五年）、浄土寺石橋町の哲学の道のふもとに下宿していました、しばしば法然院を訪れました。昭和三〇年頃、吉田上大路町の河上秀様のお宅に安井病院の若手医師としてしばしば往診し、リウマチの治療の注射などさせて頂いていました頃を想い出しています。

京都市 橋本 雅弘

五 このころ

去年の十月二十日にはヒロシマ・ナガサキアピールに対して多数の先輩各位の署名とカンパをいただき、心から御礼申し上げます。一年が経つのも実に早いものです。中曽根首相の人種差別発言・女性観発言など……。九月二十六日は日本共産党が「核戦争阻止、核兵器廃絶のために核兵器実験禁止のために」声明が発表されました。いよいよ疾風怒涛の秋かと存じます。

姫路市 片山 卓二

世の中のさまざまな悪変化の中で河上博士を想起することしきり。父はその晩年で、若き頃のめぐりあいをいつも温めております。いつも思

っていることですが、二人分の会費を払っているのになぜ本は一冊しか来ないのですか、おかしいと思います。いい内容ですからよけいそう思います。別人格ですから。

京都市 寿岳 章子

（事）お説の通りです。事務局の財政状態がこんなケチ臭い、失礼なことを致しました。申し訳ありません。

岩国市立岩国図書館では今年、河上肇の没後四十年にちなんで十一月の八、九月の図書館まつりで、河上肇と河上左京をあつかうことを計画され、記念講演と著書や原稿、遺作の絵画などの展示が予定されています。半世紀まえにくらべて社会の大きな変化と発展をおもいかえしております。

岩国市 河上 莊吾

言うを得ざれば黙するに如かず

この様な事にならない為に国家機密法は断乎阻止しなければと思っています。ところでこの言葉は強権の前にひれ伏したものではないと思います。ファシズムは沈黙は許さない。それに抗しての姿勢だと私は思うのですが。

小野田市 谷口年男

全集二十一巻「言ふべくんば眞実を語るべし」を読んで、いまの日本にも通じるものがあると思いました。中曽根さんの意のままに動く〇〇審議会の委員達よ、「眞理の前に叩頭する代りに権力者の脚下に拝跪する学者たち、身を反動の陣営に置き、ただ口先だけで進歩的に見ゆる意見を吐き散らしている文筆家たち：」。河上先生の爪の垢でも煎じてのみなさいと申しあげたい。いまの日本、

眞実の全貌を語らねばならない大事なときだと思っています。

長野県木曾郡 山下千一

河上肇博士の書・詩・歌等の教養の幅広さや奥深さに興味を覚えています。若い世代に河上博士をもっと知ってもらいたいと思うこの頃です。

高山市 池之端 甚衛

山口県高等学校教員組合の専従書記長十年目になりました。細迫朝夫先生のお骨折りで山口河上会が発足し、ぼつぼつ活動をしています。国家独占資本主義の諸矛盾が国民の生活と社会風潮に非人間性をびまんさせている中で今こそ若い人たちに「河上肇精神」をとっています。

徳山市 河村敬雄

六 河上と私

昭和三年三月に京大を卒業、その直後三・一五事件で検挙されて一ヶ月半にわたり京都の警察署にたらい回しされました。上京して報道生活に入り、最後は共同通信社常務理事となりましたが、すでに八十二歳になっております。昭和三年四月末の上京に際しては河上先生から櫛田民藏さんに紹介状をいただきました。公私にわたって先生から面倒をみていただいたことを身にしみております。事あるごとに先生を思い浮かべております。先生の終生観は人道主義に貫かれているように痛感しております。

東京都 滝口義敏

東京河上会の事務所として十年ぐらい、小生の法律事務所を使っても

らったことがあります、専門外の職業ゆえ会務のお手伝いはできませんでした。想い出すのは三高時代、

河上先生の講義を盗聴して「Das Kapital」の erste band を入手したいとして阿々大声された姿と、小生自宅の近くの次女の方の住居に出身後、同居されていた頃、お孫さんを乳母車にのせて歩かれる姿が今でもまざまざと、かつくつきりと浮んで来ます。

東京都 高木 右門

直接面識はありませんが、昭和四年いらい遠くからはるかに尊敬してやまなかつた河上肇先生。一度は総会に出席して、じかに先生の想出話をお聴きしたいと思いつながら、未だ果せずにいます。齡喜寿を超えましたが、おかげさまで未だ元気にしておりますので、近いうちに念願を果

したいと思っております。

大山市 中島 邦蔵

小生大学は塩田庄兵衛先生とご一緒ですが、会社員をやめてからはもっぱらロシアの作家チェーホフの研究をしております。河上肇先生が獄中で読まれた本の中に多分チェーホフも入っていたと記憶しておりますが、先生がチェーホフの「六号室」などをもし読まれたとしたらどんな感想を抱かれたか興味のあるところ

武蔵野市 旭 季彦

河上先生の生涯にふれるとき、人間の尊厳をあいまいにせず真実を愛し、一徹なまで社会発展の法則に真正面から挑む謙虚さと、そこにはかかる苦難をいとわない姿勢を脈々と覚え、具体的で普遍的なものに納得

することが出来る稀なる師と思っている一人です。

福島市 吉田 千代子

学究であると同時に求道者・志士としての河上先生に、いつも心を惹かれています。

浦和市 山田 貢

河上肇記念会は河上学派の成立だ

岩国市 砂田 覚

父が（事務局注・田辺納氏）昭和初期、東京で河上先生の身辺護衛に当たっていた頃、先生からいただいた色紙を懐しく見ることにしました。あらためて河上先生の偉業を偲んで。

岸和田市 田辺 平

河上先生の「白眼青天を望む」の真筆が手に入りましたので、十九日には床の間にかけて鑑賞し、ご人徳を偲びたいと思っています。

福岡市 伊東 勇 夫

七 こもいも

東京と京都との中間に居りますと東京河上会と河上肇記念会との双方に出やすいようであって双方に出にくく残念です。米浜さんの御話は会報誌上でおうかがいすることにします。私自身も九月二十日に立命館

大学の日本近代思想史研究会で「河上肇の哲学」について報告して来ました。中国でも「中華全国日本哲学研究会」が結成されて、二月に大連で、八月には瀋陽でシンポジウムが開催され、河上先生の思想について真剣な学習が行なわれたとのことで

す。

岡崎市 船山 信 一

昨年の会合を思い、始めてお目にかかりました皆様方のおすがたに思いをいたしております。当方、長年すみなれた東京をはなれ伊東の山の方の家の建築で多忙にいたしております。なにしろ始めてのこととて人々のお力にたよっております。考えてみますと人生の終りへの準備をしているのだと思います。年内には家も完成すると思います。

伊東市 白石 美智子

果実組合の関係で関西の市場は年に一、二度行っていました。今度はその肩書きもはずれて暇になったかと思ったら、その分他の荷が重くなりました。

長野県北佐久郡 両角 康則

(事) 総会へのりんごの差入れ、ありがとうございました。誠に大きく立派なりんどでありました。事務局多忙で口に入りませんでした。さぞかし美味だろうと見ておりました。

総会までに「山口河上会」の記念行事について、レポをお送りします。

山口県厚狭郡 細 迫 朝 夫

(事) 地方文化の会(岩国)編、「総合雑誌——21世紀——河上肇特集」ありがとうございました。十五冊はすぐに完売でした。

彼岸花 その名にたがわず 咲きにけり

先生生誕の地で何かお役に立ちたいと思っています。

岩国市 手嶋 宗 次

毎度ありがとうございます。足の

不自由のため、どちらさまにも御無
礼申し上げております。みなさまに
よろしく。

埼玉県 小林 輝次

昨年の総会の席上、自己紹介の中
で、私の義兄（故人鮫島鱗太郎）が
河上先生のお宅に出入していたこと
に触れましたが、全集最給配本別巻
に義兄宛の書簡が掲載されておりま
して、お宅にお伺いしていたことが
はっきりいたしました。義兄の住居
は吉田でしたから、先生から書簡を
頂いているようなことはまずなかろ
うが、或いはと思っておりますので
今回ひそかに先生にお会いしたよ
うな気がいたしました。

西宮市 井上 喜代松

花落ちて

愁海棠の

濃きみどり

舞鶴市 木下 裕一



入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十五年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。



会報(回覧雑誌)

河上肇記念会 会 則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市(または京都市)に事務所を置く。
- 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
- 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
- 四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。
- 五、この会の会友および世話人は別の定めによつて選び、総会において承認を与える。
- 六、世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもつてあてる。
- 七、この会則の改廃は総会の議決による。

会費は年額三〇〇〇円とする。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は
事務局へご一報下さい。

〒542 大阪市南区島ノ内一〇一〇一九

(丸善石油ビル) 千代田商事株式会社内

河上肇記念会



貧乏物語 初版

〒 542

大阪市南区島ノ内一〇一〇一九 (丸善石油ビル)

千代田商事内 河上肇記念会

電話 (〇六) 二五二一三六九六

振替口座 大阪 三二三一九五

京都(きょう)に煙あり

1965年 創刊 只今50号

「煙」同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24

児玉 誠 方

電話 京都 (075) 811-7646 番

振替 京都 2-15653 番

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名(74~84才)が出している異色の同人誌。語り部として戦前活動家の埋もれた青春像の発掘を柱に「煙」を編集・発行する一面、同時に戦後への架け橋たらんとしてもいます。

A5版 120頁 頒価 500円 〒200円